山と花のたより　185号

２０１５年１２月１５日

松尾忠

メールアドレス　tadashi6414@smile.ocn.ne.jp

ＨＰ http://yama-to-hana-no-tayori.sakuraweb.com/

高円山（たかまどやま）に登る

１２月２日友の会山歩きクラブの例会登山は高円山だった。この山は奈良市の東山連峰の一角にあり、白毫寺（びゃくごうじ）の裏にゆったりとした山稜を見せている。山頂標高は４６０ｍ。

５０年前私がサラリーマンになったばかりの頃、ここには大和盆地の眺望を売り物にして高円山ホテルが建っており、会社の忘年会か何かでホテル自慢の「柳生鍋」をつついたことがあった。

奈良大文字送り火

今ではホテルは取り壊されているが、この山の斜面で大文字送り火が焚かれて、夏の恒例行事になっている。この送り火は終戦記念日８月１５日夜に灯され、アジア太平洋戦争の戦没者慰霊と世界平和を祈るものなのだ。慰霊の対象となる奈良県出身戦没者数は２９２４３柱とされているが、餓死、病死も含めた戦争犠牲者の数はもっと膨らむに違いない。

世界で４０００万人以上、日本で３１０万人の犠牲者を出した第２次世界大戦、この惨禍を忘れないために送り火は灯されるのだ。

なお、戦争犠牲者と言うなら、戦争に反対して弾圧をうけた人々の事も私たちは忘れてはならないと思う。治安維持法違反で逮捕・送局（検事局に送られること）された人の数は全国で７万５千人以上、拷問による虐殺、獄死、病死などの犠牲者は分かっているだけでも１６８２名にのぼっている。小説「蟹工船」の作家・小林多喜二も特高の拷問で殺されたひとりである。戦前日本で政府の暴圧に屈せず自らの信念・良心を貫いた人たちのことを私が知ったのは高校時代だった。この人たちへの強い畏敬の念を抱くとともに、なぜかホッとしたことを今でも思い出す。

火床（ひどこ）からの大和盆地と青垣

↓大文字送り火火床からの大和盆地北部

大文字送り火火床からは大和盆地とそれを取り巻く山々が見渡せた。

これらの山々は古くから青垣（あおがき）と呼ばれてきた。　（たたなづく青垣山、こもれる大和し美わしーーー古事記）

北には平城山（ならやま）丘陵、西には生駒、二上、葛城、金剛の山々、南には吉野・大峰の山々の連なり、そして東には山

↑ナラ枯れ対策を施された木々

の辺の道がその西麓を縁取る三輪山や竜王山などの連山と背後の大和高原。まさに四囲をかこむ緑の垣根なのだ。

後世に残すべき大切な財産

そしてこれらの山々には優れた自然景観は**もとより**、歴史的遺跡や昔からの宗教施設など文化的遺産も多く、国立公園、国定公園、県立公園などに指定されているだけでなく、重要な地域は世界遺産に登録され、人類の共有財産となっている。

これらの遺産を大切にして、子々孫々に受け継いでもらいたいが、今その山々に異変が起きつつある。

ナラ枯れ

「ナラ枯れ」もその異変のひとつである。「ナラ枯れ」はナラ類（ブナ科コナラ属のコナラ、ミズナラ、カシワ等）、シイ、カシ類を枯らす伝染病で、病原菌はナラ菌と呼ばれるカビ、それをカシノナガキクイムシという昆虫が媒介する。

奈良市内白毫寺近くの登山口からの道は、落ち葉の積み重なる広葉樹林帯の中を緩やかに登っていく。清々しい初冬の風情だが、すぐに異様な光景にぶつかった。幹をビニールでぐるぐる巻きにされた大きな木々が続々と現れるのだ。無残、無粋な姿だが、これは「ナラ枯れ」の蔓延を防ぐための対策が施されたものなのだ。それにしても無粋だ。

展望のきく個所から遠方の山を見ると、紅葉とは明らかに違う茶褐色の塊が点々と見える。奈良の山もまだ今から被害が広がるのだろう。二上山でも茶褐色の斑点が見受けられる。全国的には被害は山を越えたとの報もあるが、奈良の山々の今後に不安が広がり、さらにこうしたドングリの生産樹木が激減した場合、それを食べる動物や野鳥の生態、昆虫、キノコなど自然の生態系にどんな影響が出るのだろうか。

イズセンリョウ（伊豆千両）

右の白い実をつけている植物はイズセンリョウ。かつてはヤブコウジ科イズセンリョウ属とされていたが、新しい分類ではサクラソウ科となっている。

さて高円山から春日奥山にかけて、やたらとこの白い実が目立つ。それはこの植物を鹿が食べないからで、奈良公園のアセビ、春日の森のナンキンハゼやナギの繁殖同様、ここの植生の独特の特徴とされている。

ところがである。最近奈良公園の鹿がアセビやイズセンリョウを食べ始めたとの報告がされている。鹿の頭数増加による森林植生の貧化が大問題になってきたが、今後は今までになかった複雑さを伴って生態系の変化が起こってくるのだろうか。

いよいよ野山の異変から目が離せない。

↑イズセンリョウの実